

京町本丁 漱石記念緑道

明治29年、夏目漱石は、池田すてんしょ(上熊本駅)から、現在の京陵中学校前をとおる京町に登り、新坂を降りて、第五高等学校に赴任しました。熊本市では、漱石の通ったこの道を「漱石の道」と名付け、京陵中学校の校庭の一部を道路と一体化した緑道として整備を行いました。小説草枕に登場する花木が植えられた「漱石記念緑道」には、樹齢100年を超える大きな楠が繁り、憩いの場所として地元の人々に利用されています。



すみれ程ほどの 小ちいさき人ひとに 生うまれたし

この句は、夏目漱石が明治30年2月に正岡子規に送った四十句のひとつです。平成6年に句碑が京陵中学校正門横の漱石記念緑道に設置されました。第一高等学校を優秀な成績で卒業した帝国大学英文学科第2回卒業生、3年後には文部省から英国留学を命じられるような将来を期待されていたエリートの漱石が、道端の小さな堇の花を見て詠んだ句です。





もくれん はなばか そら
木蓮の花許りなる空をみる

夏目漱石の小説「草枕」より抜粋

『庫裏(くり)の前に大きな木蓮(もくれん)がある。殆(ほとん)ど一抱(ひとかかえ)えもあるあろう。高さは庫裏(くり)の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上もまた枝である。そうして枝の重なり合った上が月である。普通枝がああ重なりと空は見えぬ。花があればなお見えぬ。(中略)極度の白さをわざと避けて、この温かみのある淡黄に、奥床(おくゆか)しくも自らを卑下(ひげ)している。余は石盤の上立って、このおとなしい花が累々(るるい)とどこまでも空裏に蔓る様を見上げて、しばらく茫然(ぼうぜん)としていた。目に映るのは花ばかりである。葉は一枚もない。』

木蓮(モクレン)は、原産地が中国で、花が蓮(ハス)の花に似ているところから、木蓮と書くようになりました。風も暖かくなり、春の気配を感じられる頃になると、漱石緑道では、最初に白い白木蓮(ハクモクレン)の花が咲きほこります。早春の頃に、一度、京陵中学校前の漱石緑道まで、白木蓮の花を見に来てみませんか。

